

Dear One

ダイジェスト版

特別対談

大学受験グノーブル代表

中山伸幸先生



Nobuyuki Nakayama

東京大学大学院人文社会系研究科

阿部公彦教授

Masahiko Abe



東京大学が求める英語力

グノーブルで手にできる英語力

大学入試、とりわけ東京大学の二次試験は「知識量」だけでは突破できない――。

英米文学研究の第一人者である阿部公彦教授と

グノーブル創設以来、多くの東大合格者を送り出してきた中山先生によるスペシャルな対談が実現。

お二人の対話から浮かび上がったのは、「読み書きの力」が持つ本質的な意味でした。(文責・編集部)

「過去問の点数」では測れない知の力

現在の受験は「タイバ・コスバ」が重視され、精読で文章の構造を把握し、音読でリズムを体に染み込ませる。この「読む×音」の相乗効果こそ、最終的に大量の過去問演習を積み重ね、試験慣れをして点数を上げることが「合格への正しい努力」として受け取られがちです。しかし、その風潮に警鐘を鳴らします。

「過去問を解けても、『深く読む力』が育っていない子がとても多い。文章の裏側にある、歴史や文化の文脈に、思考が届いていないのでは?」(中)

たとえば「児童文学は18世紀には存在しなかった」という英文があっても、「18世紀=産業革命」「産業革命以前の西欧における市民生活は貧しく、子どもが働き手だった」という背景に自然と思考が伸びていかなければなりません。卒業生たちが口を揃えて「『知』が凝縮された英語教材」と語るよう、授業では語彙や構文に加え、英文の背景にある歴史や筆者の思索にまで踏み込んだ解説が行われます。「文章を読むことは、筆者との対話である」――その姿勢を、何よりも大切にしています。

表面的な解説には、実際に英語を使うシーンでも影響が。グノーブルの英文教材は、単なる受験演習の道具にとどまりません。卒業生たちが口を揃えて「『知』が凝縮された英語教材」と語るよう、授業では語彙や構文に加え、英文の背景にある歴史や筆者の思索にまで踏み込んだ解説が行われます。「文章を読むことは、筆者との対話である」――その姿勢を、何よりも大切にしています。

表面的な解説には、実際に英語を使うシーンでも影響が。「最も困るのは、『意図を読み違える』ことです。単語の意味は辞書で調べられても、文脈が読めなければ理解には至らない」(阿)

東大入試が一貫して「ありきたりな文章」を選ばないのは、文脈を読む力を試すためでもあるのでしよう。

「最も困るのは、『意図を読み違える』ことです。単語の意味は辞書で調べられても、文脈が読めなければ理解には至らない」(阿)

AI時代に必要なのは「AIを使いこなす力」

AIを使った英語学習の危うさを、阿部教授はこう指摘します。

「AIを『盲信』する人と『管理する人』に分かれること。使いこなすには、そもそも英語の基礎が必要」(阿)

中山先生も「AIの指摘が正しいか判断できる目が必要」と共感。正しく見極める「目」は、結局のところ「深く読める力」から生まれます。

高校生になつたらどんな本を読むべき?

「読む力を育てる読書について尋ねると、阿部教授は『2種類の読書』を推奨します。

1.スラスラ読めるもの(エンタメ・啓発など)

「文章には『音声性』がある。ときにゆっくり咀嚼し、ときにテンポよく読み、文脈を感じ取る感性を育ててほしい」(阿)

「文章には『音声性』がある。ときにゆっくり咀嚼し、ときにテンポよく読み、文脈を感じ取る感性を育ててほしい」(阿)

「文章には『音声性』がある。ときにゆっくり咀嚼し、ときにテンポよく読み、文脈を感じ取る感性を育ててほしい」(阿)

書く力は「型を変えて何度も書く」が鍵

英文を書く力を伸ばすために、阿部教授は型のバリエーションを重視します。

「書く力は『型を変えて何度も書く』が鍵」
英語を書く力を伸ばすために、阿部教授は型のバリエーションを重視します。

「書く力は『型を変えて何度も書く』が鍵」
英語を書く力を伸ばすために、阿部教授は型のバリエーションを重視します。

「書く力は『型を変えて何度も書く』が鍵」
英語を書く力を伸ばすために、阿部教授は型のバリエーションを重視します。

「書く力は『型を変えて何度も書く』が鍵」
英語を書く力を伸ばすために、阿部教授は型のバリエーションを重視します。

「書く力は『型を変えて何度も書く』が鍵」
英語を書く力を伸ばすために、阿部教授は型のバリエーションを重視します。

精読で文章の構造を把握し、音読でリズムを体に染み込ませる。この「読む×音」の相乗効果こそ、最終的に文章を「多面的に」理解することにつながります。

「上がり、理解も深くなる」(阿)

グノーブルの指導が目指すもの

中山先生は、長年一貫して抱き続けてきた思いを語ります。

「東京大学に入るための『点数』ではなく、入学後に伸びていく『知の力』を育みたい」(中)

過去問の形式に慣れただけの学習では、大学での学び、さらには先にはつながらない。

「伸びしろを決めるのだと。阿部教授も強く同意します。



中山伸幸 なかやまのぶゆき

グノーブル・グループ代表

大学受験グノーブル英語科。

受験学年を中心に英語授業を担当。

阿部公彦 あべまさひこ

東京大学大学院

人文社会系研究科・文学部教授。

大学では英米詩を中心に教えている

